

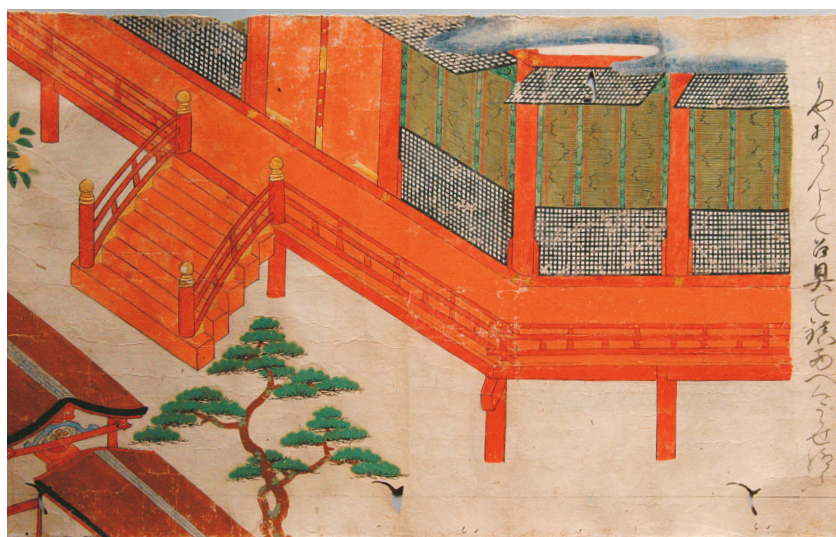
鰐鳴八幡宮本八幡大菩薩御縁起

— 影印、翻刻 —

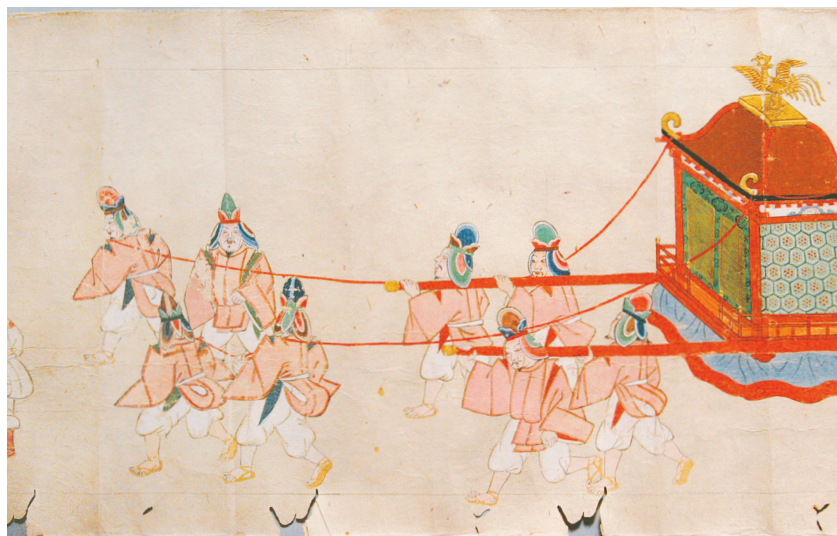
筒 坪 黒
井 井 田
大 直
祐 子 彰



八幡大菩薩御縁起上
 夫我朝秋津湯墨葦原中國首
 天神古代地神五代五十二代有皆
 神人涉代也彼地神弟五神彦波
 瀲武鸕鷀草葺不合尊弟五神子
 神武天皇中八人代始也彼帝
 以來人至十六代御中應神天皇中
 八幡大菩薩法事也御父仲哀
 天皇法字二年自新羅國より夷歌
 乃軍兵競來日本國を討取じと
 天皇勅曰皇后宮懷妊の事若男若女
 龍乃の聲小なり女子を龍皇の
 后と名づ給ふ仲哀天皇九年二月廿日
 筑紫穗日宮に御坐る時其後
 神功皇后新羅百濟高麗を討つるに
 多良鎮西へ赴給ふ時羅城門に在り
 給ふに法皇清めりけるを願ふと通我
 小力なれば夫國の龍なりけり我國
 正安福也なりと給ふと給ふに法皇

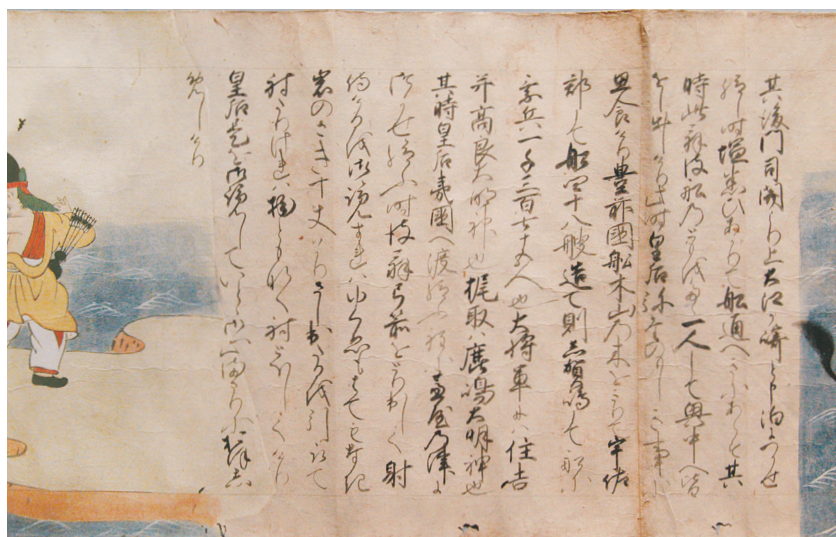


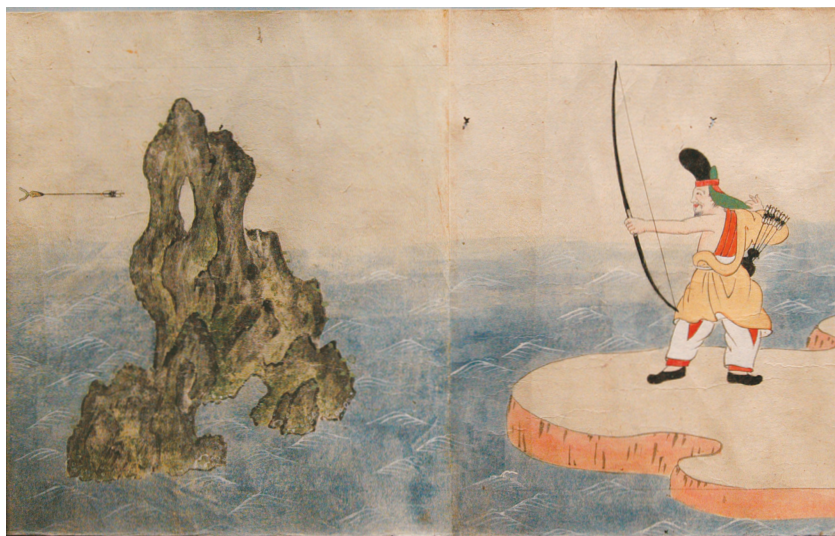




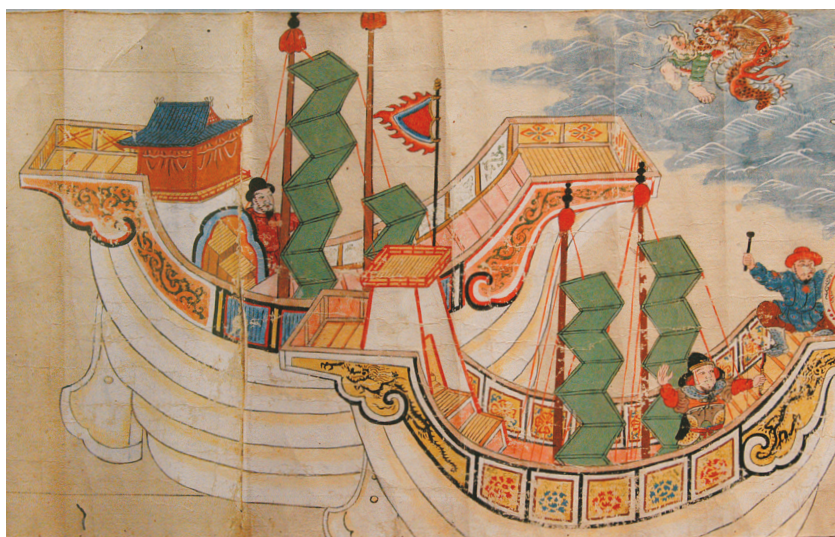
備後乃泊ふうとて 四高十丈りて



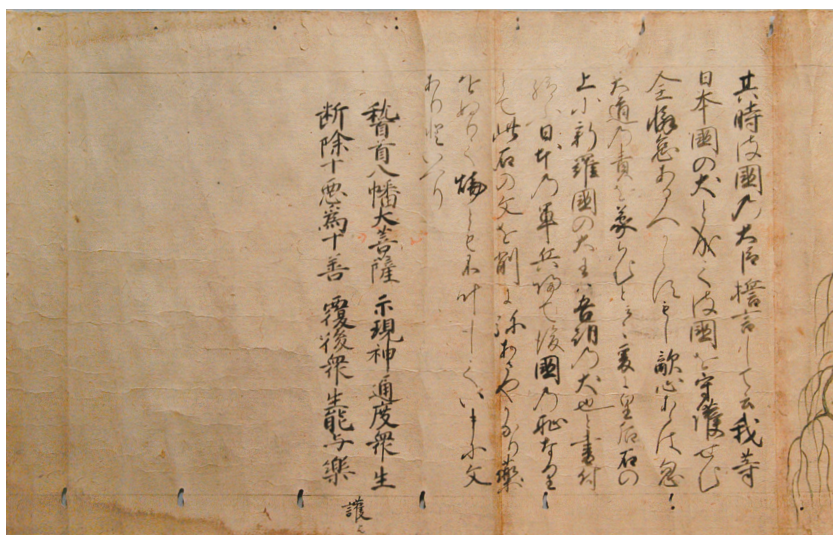






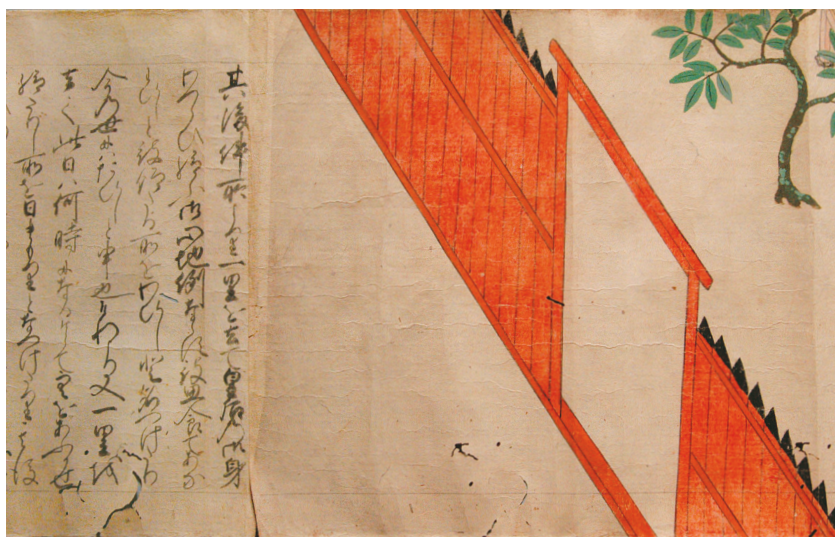


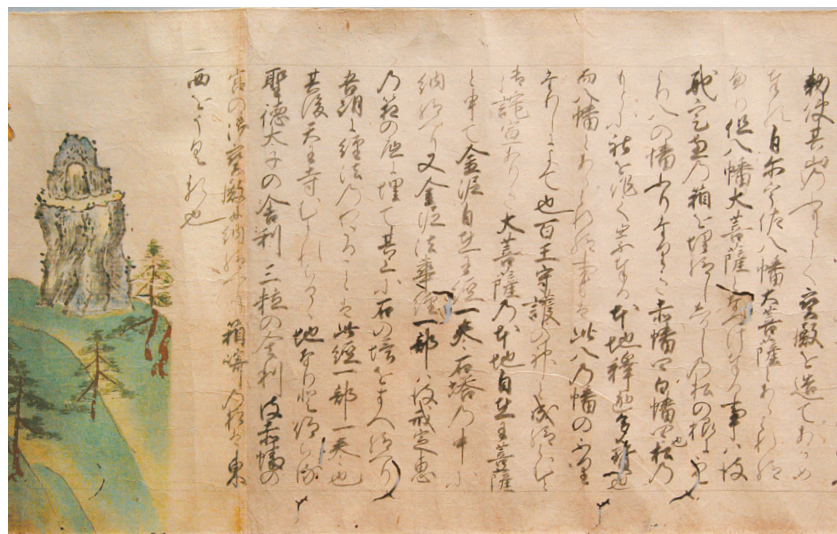




八幡大菩薩御縁起下
其後皇后又彼國を討伐し、筑前國小
濱着なり。十日し申、小人の形をてり、故

八幡大菩薩御縁起下
其後皇后又彼國を討伐し、筑前國小
濱着なり。十日し申、小人の形をてり、故
屋を造り、椀乃木よりつくり、てり、まじ
と生なり。椀乃木よりつくり、てり、まじ
つくり、まじ、つくり、まじ、つくり、まじ、
富朝也。是故、てり、卯日、大菩薩、人、法
縁日と申也。十二月十四日、法、生、なり、て
申、祓事、と、行、なり、法、生、南、と、清、なり
て、七日、中、紀、云、皇后、つ、なり、これ、縁、と
新羅、主、人、門、は、海、也、なり、なり、なり、なり、
新羅、を、討、く、なり、なり、年の、乙、未、月、皇后
部、へ、なり、なり、なり、なり、なり、なり、なり、
龍、主、舞、なり、成、なり、後、後、國、なり、なり、なり、
生、なり、今、の、年、野、明、神、也、也、共、なり、なり、
以、來、龍、主、の、神、跡、なり、なり、なり、地、の、尾、あり
なり、其、尾、なり、なり、なり、なり、なり、なり、なり、
物、本、なり、なり、又、皇后、の、雲、圖、なり、なり、なり、
時、り、なり、なり、法、生、宇、依、の、神、勒、奇、なり、
納、事、なり、也、也、文、を、能、なり、なり、なり、

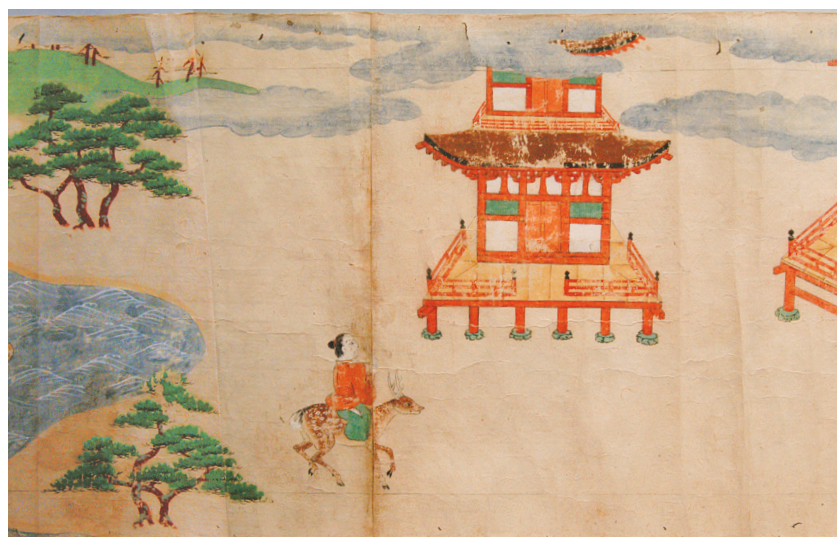


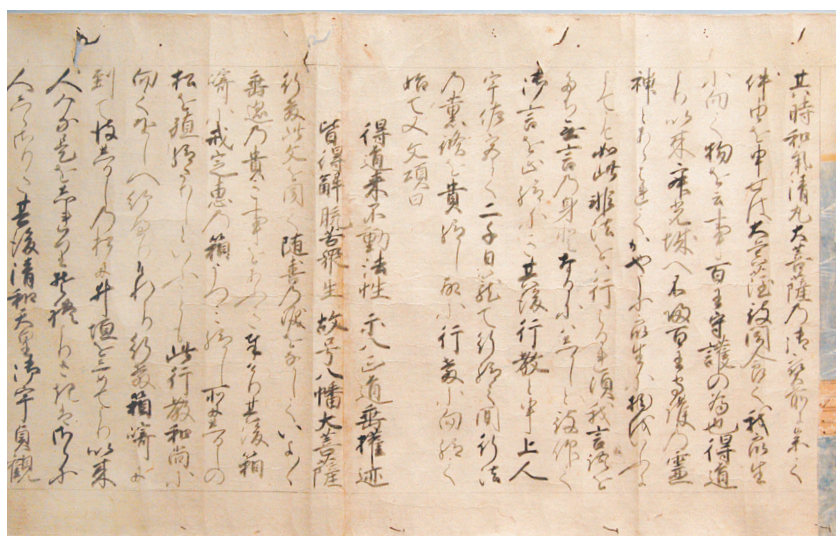




人王第三十代欽明天皇位小即於十二
 年小即於始て神明に即ち大宮司の
 補任給ふ僧職三年より天皇初國
 宇佐郡蓮臺寺山の麓に小野與小
 能治と名附あり其相白奇異也大伴是
 と自云く我くそ人よわく思ふ是又
 殺して三年の間縋りて死す云
 我三年て五殺と云ふ能治と云
 其相白奇異也此時孫三歲の小兒
 我前ありわく此時孫三歲の小兒
 現て竹乃葉より始て蛇魚曰我々
 日本十六代の誓言田原也汝と護國
 靈驗威力神通大自在菩薩也也
 國に於て汝と木的と當てて能治と
 也其後馬城の事あり其跡現れ顯
 跡大忌外此等の名跡現れ三和聖
 内府也高一丈四尺廣一丈四尺と能治
 言ふの跡跡現れ内府也其人能治







始て又文頭
 得道兼不動法性 示三道無權迹
 皆得解脫苦衆生 故予八幡大菩薩
 行教此文と云く 隨喜の誠をいふ
 無邊の貴い事と云ふ 幸なり其後相
 濟、戒定恵の類なり 而して此の
 松を植ゆるもいふ 此行教和尚
 向くなり 終分あり 行教相濟も
 到て板より 杉木井頭と云ふなり 以
 人々か是を予まゝに花換りてこれなり
 人々あり 其後清和天皇御宇貞觀
 七年庚七月五日夜す 小形 五観
 地七の 池に面し 小形 五観
 なり 願ふ我々玉城を石清水と云
 我則國家を鎮護したるを現し
 あり 行教多味と云へ八幡大菩薩と云
 幸なり 是より 後男山におけり 行教
 感波難柢 中と云へ 此山を
 廣いなり 不す 女形と云へ 現し
 終つておけり 石清水のなり 棟三
 年 行教之方なり 不す 女形





略解題

神功皇后の三韓出兵や応神天皇が八幡大菩薩に化現する物語を描いた八幡縁起絵巻は、現存最古の年紀を持つ出光美術館本を始めとして、数多く制作され、現存するものも一、二に留まらない。その中国地方における八幡縁起絵巻の伝本については、例えば白杵華臣氏「防長の八幡縁起絵巻について」（神道大系・安芸・周防・長門国）月報89、平成元年）が、「室町時代のものを中心に現存するもの二十三件、亡失したもの二十二件、合計四十五件の存在が知られる」として、防長地方に数多くのそれが伝来していたことを報告されている。しかし、それらのテキストの学術的調査や他の伝本との比較などは十分に行われているとは言い難い。そこで、本誌前号の東原本に続き、防長地方に伝存する絵巻の中から、この度山口市上小鯖に鎮座する鰐鳴八幡宮所蔵の絵巻（以下、鰐鳴八幡宮本と呼ぶ）の影印と翻刻を掲載することとした。

鰐鳴八幡宮は、長州藩が天保十二（一八四一）年に編纂した「風土注進案」（『防長風土注進案』12山口宰判上、山口県立山口図書館、昭和35年）に、

社伝、当社ハ寛弘長和の頃豊前国宇佐より鎮座云々とあり、平安時代に宇佐八幡宮を勧請して創建したと伝え、

早い時代から八幡神に対する信仰があったことが知られる。また、坂倉道義氏『小鯖村史』（小鯖村史刊行会、昭和42年）には、

本社では寛弘元年（一〇〇四）を創立の年と定めて式年祭を執行している。当時小鯖在住の原田・刈屋・伊藤の三家の先祖が神霊を迎えに行つたと伝えられている。帰途小郡湾から榎野川をさかのぼり、山口の鰐石に上陸した。当時は鰐石が着船場になっていたことは事実と思われる。鰐がこまで従いて来て、別れを惜しんで鳴いた。その故事によって鰐鳴宮と称したと今猶伝えられている。思うに彼の地から供奉して来た人などが鰐石で別離を悲しんで声をあげて泣いたものであろう。今は鰐鳴と書いているが、古くは鰐啼と書いている。

と、社名の由来となった話が記されている。そして、本絵巻について白杵氏は、

大和絵調で、特に建物や随所に描かれる松樹の表現は土佐派の画風を示している。軸の身に「大内時代、縁起画書相良遠江守寄進」の墨書がある。もとより後筆で、そのまま受けとることはできないであろうが、描写も緻密で彩色も優れ、中央絵師の手になることは確実で、詞書も力強い伸びのある筆致を示している。防

府天満宮（防府市）に伝存する、大内義興が在京中に土佐光信に絵を、相良弘恒に詞書を書かしたとの伝のある「松崎天神縁起写」と対比されるものである。

と、述べられた。現に鰐鳴八幡宮には、絵巻の制作者として名前が上がる相良遠江守が描いたとする三十六歌仙図の額が伝存している。

鰐鳴八幡宮本は紙本着色上下二巻、料紙は鳥の子である。その表紙は軸棒に、

元文五庚申三月十七日 表紙裏打 奉寄進山田五左衛

門源直賢

と記されているように（軸棒に名前がある山田五左衛門直賢は、毛利元就に属し、元禄四年へ一六九一に寄組に入ったという記録がある）、山吹色金花唐草模様の上に改装されたものである。上巻のそれは、縦三〇・二糎、横二六・四糎で、下巻は縦三〇・二糎、横二五・〇糎となっている。外題はなく、内題は、「八幡大菩薩御縁起上（下）」とある。詞書は漢字平仮名交じり文で書かれ、上下巻共、詞書六紙、挿絵五紙で構成され、上巻の長さは、九六一・二糎、下巻の長さは一〇一三・一糎である。上下両巻の軸棒は長さ三十三・八糎で、直径は二・〇糎となっている。

鰐鳴八幡宮本は、甲類に属するもので、戦勝の碑を書く

神功皇后の下に、虎を描くなどの特徴を有し、深い関連を有すると見られる国文学研究資料館蔵本（山口市今八幡宮旧蔵、文正元へ一四六六年写）との比較その他、なお今後の課題としたい。

翻刻に際しては、改行及び、表記は原本通りとし、句読点は施さない。用字は通行の字体に改める。本文中に絵の入る位置を、（図一一）の形で示した。

付記

本書の影印、翻刻掲載を許可下さった、鰐鳴八幡宮古屋倫史宮司に対し、心から御礼申し上げたい。小稿は、平成23年度科学研究費基盤研究(B)、並びに同佛教大学特別研究費による成果の一部である。

鰐鳴八幡宮本八幡大菩薩御縁起(上卷)翻刻

八幡大菩薩御縁起上

夫我朝秋津島豊葦原中国昔

天神七代地神五代已上十二代者皆是

神の御代也彼地神第五神彦波

瀲武鸕鷀草葺不合尊第五御子

神武天皇と申は人代始也彼帝より

以来人王十六代御末応神天皇と申は

今の八幡大菩薩御事也御父仲哀

天皇御宇二年^{癸酉}新羅国より夷敵

の軍兵競来て日本国を討取むとす

天皇勅曰皇后宮懷妊の王子若男子たらは

竜王の尊になすへし女子たらは竜王の

后とすへし然に仲哀天皇九年^{庚辰}二月六日

筑紫橿日宮にて程なく崩御畢其後

神功皇后新羅百濟高麗を討したかへむ

ために鎮西へ赴給し時羅城門を出させ

給ふとて御祈請ありけるは願は天道我

に力をそへて彼夷国の敵をほろぼして我国

を安穩になさしめ給へと申給しかはいづくより
ともしらす白髮老翁一人出来れり皇后

問曰いかなる老人なるらん老人答云君新羅

百濟等を討したかへむとて思食たゝせ給ふ

翁も御供申候て御力に成奉らんとてまいりて

候也と申時皇后御心中におほしめす様

彼老人の体さしも我力になるへしとも

おほえすと思食なからもし變化の者にて

もやあるらんとて召具て鎮西へくたらせ給ふ

図一

備後の泊につかせ給し時高十丈はかりなる

牛出来て彼皇后の乗せ給たる御船を損

さゝむとする時此老人彼牛の角を取て

海中へ投入給ふによて此泊をは牛まるはし

と書て牛まとゝ申也此牛島と成て今に

海中にありけりよりして皇后此老人を誠に

憑敷者に思食てちかく召寄て何事

も委被仰合けり

図二

其後門司関より上大江か崎と申泊につかせ
給し時塩悉ひあかりて船通へきにあらす其
時此翁彼船のともをたゝ一人して奥中へ皆
をし出しけり此時皇后弥たのもしき事に
思食けり豊前国船木山の木をきりて宇佐
郡にて船四十八艘造て則志賀島にて船に
乗兵一千三百七十五人也大將軍には住吉
并高良大明神也梶取は鹿島大明神也
其時皇后夷国へ渡給ふ程に蘆屋の津に
つかせ給ふ時彼翁弓箭をとり出して射
侍けるを御覧すれはゆくゑもはてもなき
岩のさき十丈はかりさし出たるを引取て
射たりければ物ともなく射とほしてけり
皇后是を御覧していとゝ御心まさりにおほし
めしけり

図三

其後かすいの浜と申所に着給ふ皇后老人
に被仰様新羅百済国へ渡着ても彼夷
敵共はいかゝして討従へきともおほえすと
被仰ける時老人申様是より西に鹿島と申

所候彼島に安曇磯良と申者あり此童を
召竜宮城に遣て早珠満珠と申二の珠を
かり給へ此二の珠たにも候はゝ彼国を討したかへ
ましまさむ事いとやすき事に候と申
其時皇后被仰けるは件童はいかゝして
召へきそと被仰し時老人申さく件童
せいなうと申舞をことに愛し侍也但此舞
をは誰人か舞へきと仰ありければ此老人
海中に舞台を構て彼舞をまひすまし
てけり其舞台石と成て海中に今
にあり

図四

其後安曇磯良此舞を愛せむとて
船に乗て舞台ちかく出来れり皇后
老人に仰ありけるは件の玉の事
彼童に申へきよし被仰ければ老人
童に申て云汝不知哉日本の国王
本意を遂むかために新羅百済国へ
わたらせ給ふ日本の中に居ながら
国王の仰をはいかてか背たてまつるへ

き早御力に成て彼国の者ともを
討随てまいらせよと申給ければ
此童いかてか宣旨を背たてまつる
へきと申て則竜宮城に行て竜王
に件由を申て此珠を借得たてまつり
次日早旦に皇后の御前へ持参仕けり
其時皇后御感なのめならず于時皇后
暫彼島国に立寄給ふ彼所にしろき
方なる石あり皇后大菩薩を懷妊し奉
しに此石に御腹をひやして若胎内の
太子日本のあるしとなるへくは今一月
不可生としらへ給き御記文には此石を
我体と思へしと云々胎内にまします
王子に被仰けるは我夷国を討随へむ
かために是まで渡れり汝かならず帰朝
の後生給へとて御裳のすそに石を
曩て御腰にはさませ給てありし故に
御誕生なかりき皇后忽に男の姿と
なり給て百済国へ渡給けり御方の船
四十八艘軍兵一千三百七十五人也夷国
の軍船十万八千艘軍兵四十九万六千
余人也彼国の国王大臣嘲弄して云

日本はかしこき国なり何そ女人を大將軍
とするや則彼国の軍兵とも雲霞の
ことく責来て皇后を討取奉らむとす
其時早珠を海中へ入給しかは大海
忽にひあかりて平々として陸地の
ことく乾けり夷国の者とも是を悦て
しほひについて追懸けり其時又満珠
を下し給しかは浪蓬萊のことく
起来て大海如元なりしかは夷国怨敵とも
皆悉塩水に漂て一人も不残死失畢
ある縁起云肥前国佐賀郡にまします
河上の宮に彼二の珠は納れり長五寸斗
頭は二寸はかり尾はちいさき珠也仍皇后
宮本意悉遂させ給夷敵を討亡給ふ
て被仰けるは我他国にて既若干の
人を殺す定殺生の名をあげむ事
よしなしと思食て御歎ありしかは海中より
二の竜王出現して件死人を一人も
不残くひうしなひぬ仍殺生をなけき
おほしめしける故に放生会を行給ふ
而今の放生会は夷国死人孝養の為
なり

図五

其時彼国の大臣誓言して云我等

日本国の犬と成て彼国を守護せむ

全懈怠あるへからずもし敵心あらは忽

天道の責を蒙らむと云々爰に皇后石の

上に新羅国の大王は吾朝の犬也と書付

給ふ日本の軍兵帰て後国の恥なり

とて此石の文を削に弥あさやかなり薬

をぬりて焼とも不叶していまに文

ありといへり

誓首八幡大菩薩 示現神通度衆生

断除十惡為十善 覆後衆生能与樂 護

(下卷)

八幡大菩薩御縁起下

其後皇后宮彼国を討隨て筑前国に
帰着給ふ十日と申にうの羽をもてうふ

屋を造て槐の木にとりつかせ給て王子
を生奉り給し間彼所をはうみの宮とな
つけたり王子御誕生の時は十二月十四日辛卯

寅剋也其故をもて卯日は大菩薩の御

縁日と申也十二月十四日御誕生会と申て

御神事を行給ふ産宮は南を請なり

さて日本紀云皇后のつき給へる御銚を

新羅王の門に後世のしるしの為に立給へり

新羅を討てあくる年の春二月に皇后

都へむかひまします其後約束のことく

竜王駕に成給て備後国にて若宮を

生給ふ今の平野明神是也其より

以来竜王の御孫たるに由て蛇の尾あり

けり其尾をかくさむかためになをしと申

物出来れり又皇后の夷国を責給し

時めしたりし御裳は宇佐の弥勒寺に

納まり色も文も猶あさやかなり

図一

其後件所より一里を去て皇后の御身
わつらひ給ふ御心地例ならず被思食てあな

わひしと被仰たる所をわひしと名つけたり
今の世にはたひしと申也それより又一里を
去て此日は何時になるそとて空をあふかせ
給たりし所を日まもりとなつたり其後
かすひの宮につかせ給て暫日数を経て王城へ
のほらせ給て御年三十一にて王位をつかさとる
日本紀曰仲哀天皇御宇九年春二月崩御
し給ふと云々ひそかに天皇の骸を武内宿禰
海路より長門国豊浦宮へ送いた天皇
不奉葬扶桑記云神功皇后位に即給て
其年御葬をは河内国長野山に移と云々
国を治給ふ事六十九年其後皇后王子に
位を讓給て御年百歳にて崩御畢又王子
七十にて御即位治四十一年也都太和国
高市郡后八人男女御子九人今の八幡
大菩薩は此御門の御事也此御時百濟
国より色々の物師博士をわたす又經典吉
馬等まいりけり此御門は仲哀天皇第四御
子応神天皇と申き其後十善の位をふり
捨て道心堅固にして山林にまはり行て
さたまれる所なかりき雖然筑前国に増富
七郡か内にかすやの西郷と申所にて戒定

恵の箱を埋てしるしの松をたて給へり
彼しるしと申は松の枝をおりてさかさまに
たて給へるか故に彼所をは箱崎の
しるしの松と申也而彼松権化のしわざ
なりしかは生付て逆なる松にて今の世まで
も侍也其後応神天皇穗波郡宮浦と
申所に誓わたらせ給て豊前国宇佐郡
内本山と申山にて御かさりをおろして其山の
麓にて此分段の身をあらためずして正覺
を成給ふ其所をは正覺寺となつたり其時の
御詞に云我をは石体権現といはるへしと
おほせられて正覺を成給て後彼山の頂に
三の石と成給へり其石の上より金色の光
都にさしたりしを仁徳天皇是をあやしみて
勅使を立られて尋させ給ふほとに彼山に尋
行て拝し奉れば金色の鷹にて顕給ふ
勅使其山のふもとにて宝殿を造てあかめ
奉る自に宇佐八幡大菩薩とあらはれ給
へり但八幡大菩薩となつて奉る事は彼
戒定恵の箱を埋給ししるしの松の根に空
より八の幡ふりたりき赤幡四白幡^{四松也}
もとに社を作て崇奉る本地釈迦多宝也

而八幡とあらはれ給事は此八の幡のふり
たりしによて也百王守護の神と成給はむと
御託宣ありき大菩薩の本地自在王菩薩
と申て金泥自在王經一卷石塔の中に
納給へり又金泥法華經一部は彼戒定恵
の箱の底に埋て其上に石の塔をすへ給へり
吾朝に經法のわたることは此經一部一卷也
其後天王寺むまれらるゝ地なりと仰らる
聖德太子の舍利三粒の舍利は赤幡の
宮の御宝殿に納給へり箱崎の松は東
西をうくる也

図二

人王第三十代欽明天皇位に即給て十二
年にあたりて始て神明に顕給ふ大宮司の
補任帳には僧聴三年とも云豊前国
宇佐郡蓮台寺山の麓の小野奥に
鍛冶する翁あり其相兒奇異也大臣是
を見つけ給てたゝ人にあらすと思食て五
穀を断て三年の間給仕して祈請して云
我三年まで五穀をたち籠居して給仕しつる

其相兒只人にあらざるによて也若神ならば
我前にあらはれ給へ此時翁三歳の小兒と
現て竹の葉にたち給て託宣曰我は
日本十六代の誉田天皇也我をは護国
靈驗威力神通大自在王菩薩と云也
国々所々跡を神明に垂給て顕まします
也^{云々}其後馬城の峰に石体権現と顯
給ふ大足姫比咩の大神諸共に三所並て
御座也高一丈四五尺広一丈はかりにて顕給ふ
寒雪の比御体猶温に御座也只人恐を
なして近付奉る事なし御殿を造覆けるに
御託宣ありき我石体にあらはるゝ事は
末代に至て久しからんため也此風にあたり此
流をのまむ者は罪障を滅すへし御
殿をつくりおほふことなかれと^{云々}

図三

其時国王より六年に一度勅使を立て国
の政を定おはしますといへとも物を被仰
事たゝ人にむかへるかことし称徳天皇
とて女帝のましくけるは御門御時

まては物をおほせらるゝ事ありしか
とも御門涅槃經文に云

所有三千界男子諸煩惱合集為一人女人之業障
の文を誦て我此文信せられず女人の身なり

といへとも今我此儀なし此經則虚言也と
て經を焼捨給き其とかにて淫欲の炎忽
熾盛にして既此道難忍して諸国に宣

旨をなして我思をしつむるものやあると尋て

まいらすへき由宣旨なりしかは諸国に是

を尋ぬるに河内国弓削郡とかや申所

に宝金剛院と申寺あり此寺に千日籠

したりし僧あり如意輪の法を行給き此行

の故にや院宣の人此僧の有様をみて左右

なく召具てまいりぬいかにも叶ましと申

しかとも勅宣に女帝の皇居にまいりにき

ことに御心に相叶おはしましてあまりの

御事にや八幡大菩薩へ和氣清丸を勅

使にて申させ給様は我此僧に法皇の

宣旨をあたへむとおもふ也いかゝ候へきと申

させ給ければ大菩薩御返事に申させ給

けるは王三代にくたりぬれば則民となる民三

代に上ぬれば則国王となるいかてか忽いや

しき身に左右なく法皇の宣旨をはあたへ給
へきと被仰奉れば御門重而清丸をもて

仰ありけるは今度もし大菩薩御承引

なしといふとも汝我心をしれりたとひ叶

ましかりとも領掌のよしを申せと仰ありければ

清丸大菩薩にまいりて重而雖申入更御

領掌なし仍其仰直に令言上畢其時

女帝逆鱗ありて汝我心をしれり如何

かやうの御返事をは申そとて忽に足を

切てうつほ船を造此清丸を入て海中に

被放たりきしかるに浪にたゝよひて

七日七夜と申に豊前国わまの浜と申

所に到ぬ其所に鹿出来て清丸をのせて

大菩薩の御宝殿にまいりぬ二心なく祈

念奉けり其時御殿より五色の蛇出て清丸

を舐奉れば足もとのことく出来ぬ昔は六

ヶ年に一度勅使を立給しかとも此大臣の

時より三ヶ年に一度勅使を立給き宇

佐宮は南をうく

図四

其時和氣清丸大菩薩の御宝前に参て
件由を申せは大菩薩被聞食て我衆生
に向て物を云事百王守護の爲也得道
より以来寂光城へ不歸百王守護の靈
神とあらはれてかやうに衆生に物をいふに
よてこそ如此非法をは行はるれ須我言語を
たち無言の身となるにはしかしと被仰て
御言を止給にき其後行教と申上人
宇佐宮にて二千日籠て行給の間行法
の薰修を貴給し故に行教に向給て
始て又文頌曰

得道来不動法性 示八正道垂權迹

皆得解脱苦衆生 故号八幡大菩薩

行教此文を聞て随喜の涙をなかにしていよく
垂迹の貴き事をあふき奉けり其後箱
崎に戒定恵の箱うつみ給し所にしるしの
松を殖給たりしといふことも此行教和尚に
向てをしへ給へりそれより行教箱崎に
到て彼しるしの松に井垣をしめてより以来
人みな是をしれりそれよりさきはさらに
人しらさりき其後清和天皇御宇貞観
十八年^{庚辰}七月十五日夜半に行教に示現し

給ふやう汝か法まことに難忘最上法味
なり願は我を王城ちかく石清水に可遷
我則国家を鎮護せむと示現し給し
故に行教王城に上て八幡大菩薩を遷
奉らむと思食て彼男山に到給しかは行教
感涙難抑して申させ給やう此山は
広候いかなる所にかすませ給へき示現し
給へとありければ石清水のほとりに神三本
生出たり行教是をみてかしこにそうつし
奉給し男山は南を請

図五

其後延喜御門御時一人臣御座き平朝臣
時平と申人也太宰大弑と成て下給へり
俄一任を経て京へ上給ぬ此大臣立願に
八幡三所権現に歩を運て申させ給やう
願我今一度太宰大弑となし給へ若此願
成就仕ならはかならず御殿を造改奉らむと
祈請して七日参籠して京へ上給て後程な
く又大弑となりて下らせ給にきしかるに此
大弑世間に打紛てやゝみにけんすなはち

大菩薩の御利生といふ事更に忘たりける
を女帝御願所観音寺と申寺に唯一

講師と申僧の娘の七歳になるに大菩薩

つかせ給て地をさる事一丈空を飛大式の

御座ける御前に行て御託宣云汝おほすや

如何京上侍し時我宝殿に七日参籠して

我に願を発たりし此願力にて今爰に大式

の職たり何に神恩を忘て此願をは遂さす

そと御託宣ありし事は延喜廿一年の事も

さるほとに大式おとろきさはきて申給はく誠

にさる事候き凡夫具縛の身は世間事に

打紛候て此事一切不覚候き敢神恩を

忘奉事は候はす然は則御殿をや造替

へき又いかなる所にか崇奉へきと申しし時

重而御託宣ありけるは是よりいぬゐの方に

しらゝの浜あり我天下国土を守護せし始

戒定恵の箱を埋てしるしの松を立給き彼

故に箱崎となつてたり其松のもとには八のはた

ふりたりき其故をもて八幡大菩薩を彼所に

崇へき也我御殿の正方をはいぬゐの角に

向て九間に是をつくれ礎の石の上には異

国の敵の名を書へし是則夷国降伏

のためなり内廊外廊をは二陣に造て
葺合にふき二階の楼門を立よ内廊は

諸神集会の為なり外廊は往復修

行者料二階楼門は王位威勢衰へ

人民力尽たらん時さためて彼怨敵出

来む其時我楼門に上て彼怨敵を可防

人間のくるしみは我くるしみ也我に別の

すみなし正直の人の首をもて栖とす鉄の

熱をはうくるとも不善の者の施をは不

受と御誓あり但我身は必五八月に

彼所に影向を垂て夷国の殺害の

ものを孝養する身也と御託宣ありしかは

彼大臣平時平箱崎にまいりてすみやかに

任御託宣宝殿楼門を玉をもてみかき

鐘楼廻廊には金銀をちりはめ社領を

寄たてまつりて宝社造営より以来

三百余歳に及へり抑八幡三所権現は

中御前の御垂跡は本地は是大日本国

人王十六代誉田天皇の御霊也我をは

名護国靈驗威力神通大自在王菩薩、

大悲菩薩の御身也本地阿弥陀如来なり

西御前は御垂跡人皇第一代の神玉依姫の

尊也本地大勢至菩薩東御前御垂跡は
人王第十六代氣長足姬天皇開化天皇の
五世孫仲哀天皇の後は菅田天皇御母神
功皇后本地は觀世音菩薩羅城門に出来り
し老人は則住吉大明神本地虚空藏
菩薩也鹿島の安曇の磯良は島の鎮守
大明神本地大聖文殊師利菩薩也彼故
今案之大聖文殊は仏在世の昔の海中
の群類を教化して靈山淨土の法会の
砌にのそませし其中に沙竭羅竜王の姫
八歳竜女ことに文殊の教化をさとりきはめて
竜畜の姿なりしかとも忝靈山会上の筵に
五障のたもとをぬき捨て此身を持たから
皇后宮に力をそへて夷国を討したかへむ
ために竜女たやすく旱珠満珠の二の玉を
借得たりしも皆是昔の利生の故也然は
則八歳竜女我猷宝珠世尊納受と云て
釈尊に如意宝珠をたてまつりしかは世尊
是を悦て請納給き今の海神は二珠を
借得て皇后宮に奉しかは皇后是を悦給
昔も今も思に其故尤妙なる者也但かの
箱崎の松の葉あかみて枯なんとせしを

箱崎執行安部守包此松をみて申やう
此松は葛の這かゝりたる故に枯たる也かつら
をたちすてんとて此葛を切りければ此松則
枯にけり根をほりてへついとこのといふ所に置り
其後あらはなる松の根に七八寸はかりなる松
三本生出たり宮人はをみて此松をほり
昔のしるしの松のものと跡に殖たりき
しかるに件の松かれて後たゝの松生侍
たればむかしのしるしの松のやうに逆なる
松にてたてり誠かゝる靈神殊勝の所
不思議の靈地なから思食て放生会
をは行はせ給ふにこそ皇子女子は竜王の
むすめの腹におはします神とあらはれ
給ふ時若宮殿と申すされは若宮をは
夢にもおさなき兒と見たてまつるなり
武内宿禰本地阿弥陀仏因幡国上宮に
束帶たゝしくして入給しより帰給はす
山中に尋入奉るに竹あり葉に札を書
其札の銘には法蔵比丘豈異人ならんや
阿弥陀如来即我身也